

蒼語隨筆

八

終

庫	文	閣	内
一五三	二八	和	
四一	一九	書	
九	八七	類	
架	冊	號	類

内閣文庫			
番號	和	28197	
冊數	8 (8)		
函號	153	298	

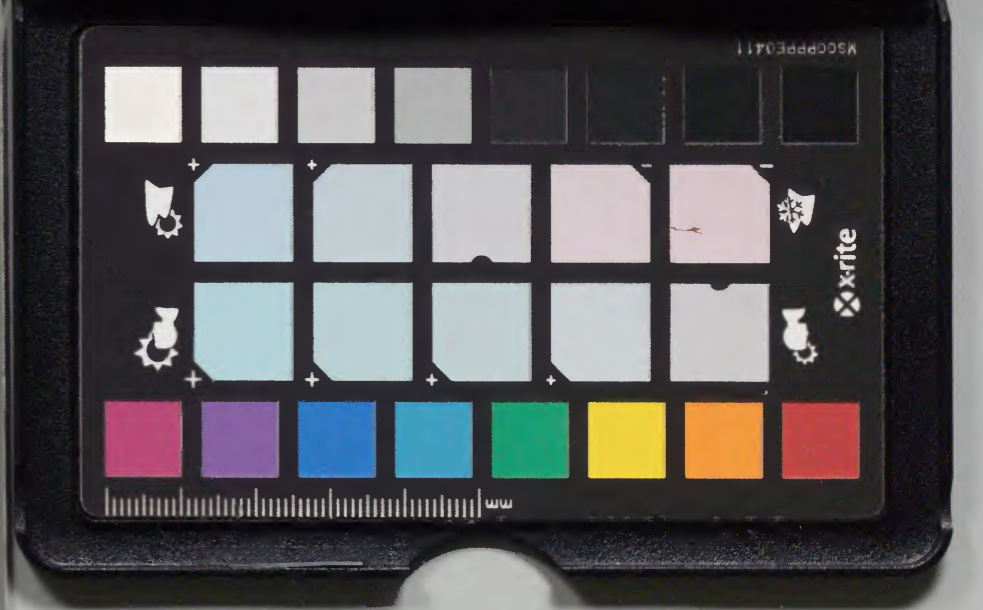


A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



明治十五年購來

令條之書新古之差異

橋嘉樹輯録

律令ノ書ハ國家政要ノ大典ニ

シテ令ハ禁於

未經トテ法令ヲ制シテ天下

貴賤ヲシテ因

家ノ法則ヲ守リ勤メシメ律ハ治於已然トテ

令書ノ法制ヲ持キ犯セルモノアルハ其罪名

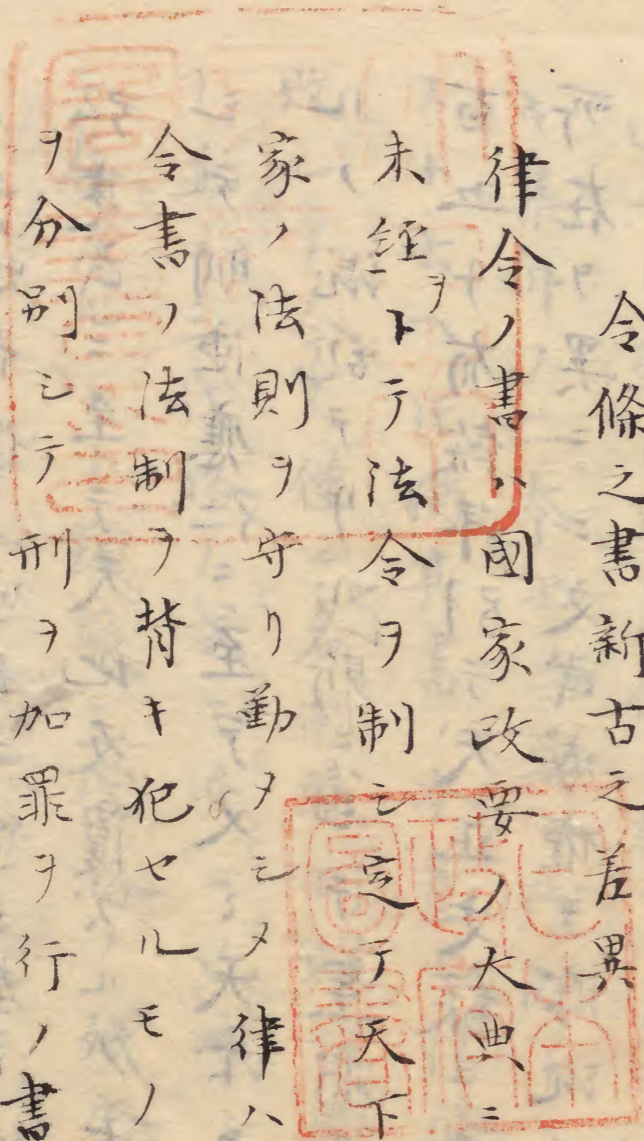
ヲ分別シテ刑ヲ加罪ヲ行ノ書ナリ唐書刑法

志曰令者尊卑貴賤之等數國家之制度也律者

其有所違及人之為惡而入于罪戾者一斷以律

ト云ヘリ然レハ令律ノ二書ハ國家ノ樞要ニ

シテ政治ノ管轄ナリ今也其二書共ニ全書ニ



滅ニテ天下ノ間法令ノ舊典備フルヲアクハ
ス是全ク保元平治ニ浴中鹿ヲ逐ヒ元暦文治
ニ逆浪公家ヲ漂流セシムルニ及ヒ刺ハ派久
ノ一炬帝位ヲ邊土ニ遷ニ奉リシヨリ以來元
弘建武ニ至テ天地反覆スルノ大乱以來引襲
シテ明徳應仁ニ至テ又々天下ヲ震動セシム
ルノ混乱アリ如斯ニシテ星霜ヲ経ル事凡ニ
百五十有餘年引テ天正文録ニ至ルニテ君臣
所在ヲ異ニシ文武成権ヲ浮沉スルノ時也令
律トモニ流行散在ニテ舊式制度名實共ニ廢

亡セリ然レ氏今僅ニ存スルモノ令義解及同
キ集解ノ二本也各並ニ殘闕アリテ全套十ヲ
スト去ヘ氏猶其書ノ本意也律條モ亦悉ク散
敗レテ今又僅ニ名例職制賊盜衛禁之四律ア
リ並ニ三代格ノ式モ共ニ亡滅ニテ是亦宇宙
ニ存スルモノ類聚三代格ノ殘本六冊幸ニ延
喜式ノ全書五十冊已而ニシテ弘仁貞觀延喜
之格及弘仁貞觀之式悉ク湮滅セリ於是今世
嗜法令之學者以令義解其基トシ併セ考ルニ
雖為殘闕類聚三代格及延喜式ノ全套ナリ然

之テ於令條有二義之論一云令我解ハ大宝
元年ニ撰定アル所ノ古令ナリト又云養老ニ
年大宝令ヲ改定アルノ新令ナリト各一決
落着ナリ且令中新古ヲ論スルニ至テ疑ニキ
ノ文間々アリト云ヘ氏天長ノ義解ノ文ニ大
宝養老ノ間ノ文ナク注々古令新令ノ名義ヲ
挙テレタル斗ナレハ今更更解ヲ以テモ論ニ
カタレ柳令書ト称セラレタルモノ、起原ハ
天智天皇元年ニ令ニ十二卷ヲ制セラレテ持
統天皇三年ニ至テ諸司ニ班テ出ヘリトアリ

夫ヨリ以前推古天皇ノ御宇厩戸皇子憲法十
七条ヲ定ラル是法令ノ起原タリト云ヘトモ
令ト称スルノ名義ナシ然ニテ文武天皇大宝
元年ニ始テ令ト律ト各其名義ヲ立テラレテ
以來其令ヲ以新令ト云ヘリ然レハ義解ノ中
ニ古令新令トアルハ若クハ天智ノ令ヲ古今
トニテ大宝ノ令ヲ新令ト云ニモ知ヘカラス
令ノ名義大宝ニ始テ設ケ名付テラレタリニ
ハ養老ノ修補アル令ヲ新令トモ云ヘキナリ
今ニ至テ疑アリテ新古ノ名義眞実ヲ得

カ夕三然ルニ今存スルモノ天長ニ箋解ヲ加
ヘラレ令ト並ニ集解ノ令ハ全ク大宝撰定ノ
令ナルト掲馬夕リナレハ古今新令ノ名箋ハ
暫ク閣キ今ノ世用ヒ学ノ令箋解ノ本文並集
解ノ本大宝元年ノ撰定アル最初ノ令ナレ事
其箋分明ナリ謹テ考ルニ件ノ令條ノ本文ハ
大宝ノ令條ノ書ニメ猶養老ニ加補ニ又減者
アル所ノ修飾ノ令條ト云ヘキモノナリ其箋論
壺井箋並羽倉在滿等ノ考アルケ条ト并嘉
樹ノ先師神原惟長ノ考書ト共ニ校合拔萃ニ

之ヲ今新ニ老邁ノ嗣筆ヲ起スモノナリ猶又
令條ニ丹精アル人ノ助言アラニ事ヲ請フモ
ノナリ

續日本紀慶雲二年四月丙寅 勅依官員令大
納言四人職掌既比大臣宦位亦起諸卿朕念之
任重事密充負難滿宜廢省二負為定兩人更置
中納言三人以補大納言不定其職掌數奏宣旨
待問參議其宦佐料祿准令商量施行太政宦議
奏其職近大納言事閑機密宦位料祿不可便輕
請其位擬正四位上宦別封二百戸資人三十人

奏可之
同書曰二月庚寅詔曰准令三位以上已在食封
之例四位以下寔有位祿之物又四位有正蓋之
貴五位無冠蓋之重不應有蓋無蓋同在位祿之
例故四位宜入食封之限又案令諸上諸臣位封
自正一位三百戶差降正從三位一百戶冠位已
高食封何藻宜正一位六百戶差降正從四位八
十戶又制七條事唯令諸長上宦遷代皆以六考
為限餘色得選色別加二考以十二考為選限百
宦得選之限大遠宜色別減二考各定選限其准

人等戶別是ヲ取ルテ慶雲三甲 戸ニ止
ル不者貧繼嗣令ニ五世ノ主不在皇親ノ
限事等顯然トシテ大宝ノ令文ナリ養老ノ
新令ナルヘクハ慶雲ノ定改ラレ、奈々何
ノ是ニ載セナルヘキ此余大宝以後養老元
年ニテノ間ニ改メ易ヘラレタルト若干餘
戸レ其改易ノ式ハ今ノ今ニ見ヘス是等
ヲ以テ大宝ノ令タルヲ知ルヘシ
右文中ノ數條ハ慶雲二年同三年ニ大宝ノ令
条ノ定ヲ改メラルヘノ詔ナレハ今幾解ヲ加

へラレタルノ令養老ノ新令ナルハ久公悉ク
件ノ改易ノ文ニ改メ定メアルヘニ大室ノ令
條ナレ故右慶雲ノ制定ハ載セラレカレ也然
ニテ養老二年ニ淳海公ノ選セラレタルト云
ハ去ル大室ノ選定アル令ヲ利修アルナリ故
ニ天平勝宝九年五月ニ至ニ勅スラク去ル養
老年中朕外祖太政大臣奉勅刊律令トアリ又
同年十二月壬午ニ大和宿祢長岡等五人養老
二年修律令功由ト云ル官奏アリ是各刊修ト
云ヒ修トアレハ大室ノ令ヲ則定アルコトニテ

以上ノ文ヲ按スルニ令義解ヲ注スルノ令
條職負令ニ大納言四人アリテ中納言ノ官
ナリ宣位令正四位ノ条ニ中納言十二卯今本
ノ令後三人ノ所為ニニテ中納言ヲ加入クル小本
况ヤ中納言ヲ從ニ位ニ定メラレタルハ養
老ヨリ後ノトニニテ天平宝字五年ノ定ナリ
田令元畿内置宣田大田横田各三十畝河田
山田各二十町每二町配牛一頭去ニ日アリ
續日本灵龜二年三月癸卯割河内国和泉日
根兩郡令供珍努宦同四月甲子割大鳥和泉
日根三郡始置和泉監トアリ灵龜ニハ養老

元ヨリ一十年前ハ祿令ニ中納言ハ食封
ノ事ナク軍防令ニ中納言ハ資人ヲ載セズ
又祿令ニ四位ニ食封トハ位録ハ列シ有リ
並ニ三位以上ハ食封ヲ定ム三位三百戸差
降ニテ四位一百戸トナリ度雲ニハ加増ニテ
五位六百戸ニ
起リテ四位ハ十戸選叙令長上以下ノ選代
ノ一六考ヲ加テ十二考ヲ以テ選ノ限ト見ユ
ル一又賦役令ニ京畿内ノ人自輸調ノ定メ
タル一並ニ丁ノ庸布歲役ニ丈六尺トナリ
一賦役令ニ羨倉ノ粟一位以下及百姓雜色

有誤

角小角之名今廢久矣ト云ヘリ名物六帖器賦
旌旗ノ部ニアリ
武備要略日本兵制同一號召也中國以金鼓彼
則以哮喘陳貝一人吹之衆人響應吹大則衆兵
頓合吹小則衆兵頓列分合布散如應呼吸又武
備要略曰日本兵制所謂吹海螺為号者也ト
リ海螺ハ今云ホラノ貝ナリ又初文ニ哮喘ト
云モハ海螺ナリ今海螺ノ名ヲホラノ貝ト云ハ
全ク上古ノ大角ヲ波良乃布江ト云ニ據テ
ホラト名ニナルヘシ又哮喘トナリハホラノ
音ヲ以テ假名書セシナリ勿論ホラハハハ

ノ通音ナリ右因スル所ノ正偽ハ詳ナラスト
云ヘトモ形容ヲ以テ考レハ波良ト云フハ哮
囉ノ轉音ニテ洞ノ義ナリ古事記ニ中ハホラ
洞アリト和訓又小角ヲ久太能布江ト云モ
ナリ考ヘ合スニ又小角ヲ久太能布江ト云モ
モ竹筒ヲ以テ制シ吹タモノニハニ管ノ笛ノ
義ナリヘシ今軍谷ニ海隈ト竹筒ヲ用ルモ前
世ノ大角小角ノ遺意ナリハキニヤ猶考部ノ
不測アラニトヲ意ノ而已又事物紀原ヲ考ルニ角ハ本ト出冠胡一云出於越
黃帝内傳云玄母詣帝制角二十四以警象像祀

大角 和訓波羅乃布江

小角 和訓久太能布江

軍防令曰凡軍圍各置鼓二面大角二口小角四

戸通用兵士謂鼓角通用也分番教習云云喪葬令曰凡

親王一呂方相孺車各一具鼓一百面大角五十

口小角一百口幡四百竿云云以下以上ノ呂々
ノ用度甲乙多寡

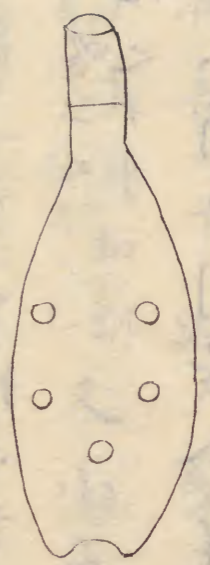
ナリ略ニテ
不記ニナリ

大角小角ノ制器今詳ナラス類聚和名抄ヲ考

ルニ角並名苑曰角本出胡中或云出吳越以象

竜吟也楊氏漢語鈔曰大角波良乃小角久太能
布江

云之白石ノ軍器考曰大角小角共ニ因テ別
印本ノ因式ニ
不見古写本ニアリ乃左ニ写ス



東涯伊藤氏曰唐礼樂志曰六軍各鼓十二鉦一

大角四角手吹大角一通然ニテ字彙曰大角軍

器羗胡吹之以驚中國之馬トアリ按ニ東涯ノ

角本起於胡後中國專用之以為戈器有鼓角之

名本朝モ前世モ驚其用軍防喪葬皆有天

令籍蔭入選雖有出身之條未聞預選之式自今

以後取蔭出身非因貢舉及別勅處分並不在

常選之限其准律令於律雖有除名之人六載之

後叙之又令內未載除名之罪限滿以後應叙之

式其宜議作應叙之條其准令京及畿內人自掄調

於諸國其宜罷入身之布掄戶別之調乃異外邦之

民以優內國之口掄調之式依一戶之下制四等

之戶掄調多少議作餘條倒其准令三丁歲役收

庸布二丈六尺當欲輕歲役之庸息人民之乏並

宜減半其太宰所部皆免收庸若公作之役不足

備力者商量作安穩條例永為法式其准令一位
以下及百姓雜色人等皆取戸粟以為其倉是矣
倉之物給養窮民預為儲備今取貧戸之物還給
之家之人於理不安自今以後取中中以上戸之
粟以為我倉必給窮之不得他用若官人私犯一
斗以上即日解官隨贓決罰其准令五世之王雖
得王名不在皇親之限今五世之王雖有王名已
絕皇親之籍遂入諸臣之例顧念親親之恩不絕
絕籍之痛自今以後五世之王在皇親之限其承
嫡者相承為上自余如令其

新選ノ令ニ非ル一明ナリ故ニ天長三年十月
五日ノ太政宣符ニモ大宝ニ令ヲ制セラレ養
老ニハ令ヲ刊修ストノ文ヲ別カテリ因テ今
ノ令大宝ノ一ニテ改易セズ養老ニ條ヲ刪
レルモノアリ選叙ノ法是ナリ集解ヲ以テ明
ムハ三字ヲ刪レルモノアリ賦役令ニ貢獻物
ノ條ノ朝集使ノ三字ナリ箋解ニ其事アリハ
凡又條ヲ加ヘタル一アリ選叙令ノ除名限滿
應叙ノ餘ナリ續日本紀ニテ是ヲ明ムハ七字
ヲ加ヘタルモノアリ戸令ニ新附戸ノ條石城

右脊ノ如字ナリ同紀ニ明ナリ又名目ヲ改メ
タレモノアリ官員令ヲ職負令トセシ是ナリ
續日本紀及格文ニテ是ヲ明ムハニ次序ヲ替
クルモノアリ職負令ノ縫部司ノ縫女部直丁
ノ下ニアリ義解ニ其謂アリ以上ノ如ク名ヲ
改メ字ヲ刪リ字ヲ増シ條ヲ省テ條ヲ加増シ
タレトノミナレハ是刑定タレト又何ヲ力論
セシヤ
今ノ令ヲ養老ノ令ト名ルハ其モトハ弘仁格
ノ序ヨリ出タレトニテ拾芥抄ノ上ノ末ノ卷

ニ見ヘタリ然ニテ其序文ノ中ニモ一所ニハ
養老二年不比等奉勅更撰律令ト云ヒ一所ニ
ハ天平勝室ノ勅ヲ引テ養老年中刊律令ト載
タレハ此序者ノ更撰スト云ヘルハ刊修ヲ指
テ更撰スト云ヘルト見ヘタリ是ヲ以テ養
老新選トシテ證トハナシ難キモノナリ况ヤ此
序ニ疑ニキ文モアレハ猶更ノ下ナリ疑ニキ
ハ枝葉ナレハ爰ニ又拾芥抄ハ近世ノ書ニテ
著多別ニ考ヘアリ誤謬尤多キ書ニテ其本弘仁格ノ序ヨリ書ク
ル見ユレハ是ハ論スルニ及ハス

又令卷数ノ一世ニ云大宝令ハ十一卷養老令
ハ十卷ト今ヲ令養老令十卷ト故十卷ト云ル事
ハ右ノ弘仁格ノ序ニ大宝元年不比等奉勅撰
律六卷令十一卷養元二年ニ又同大臣奉勅撰
律令各為十卷又天長三年十月五日大改官符
藤原太政大臣奉勅制令十一卷律六卷トアリ
又養老年中同太政大臣奉勅刊條律令各為
十卷ト見ヘタルニ依テナリ在滿考云天長官
符ノ養老律令ノ一ハ三代格一本ニ刊修律令
合為十卷トアリ是律ト令ト合テ十卷ト云事

ニテ令斗十卷ト云フニハ非ス其各為十卷ト
アル本ハ傳寫ノ誤ナリ何トナレハ令ハ大宝
ニ十一卷十レハ刊テ十卷ト云モ尤ナリ律ハ
大宝ニ六卷十レハ刊テハ五卷以下十レヘシ
刊テ十卷ト加増スルトハアルヘカラス加増
セハ刊ルト云ヘカラス唐律唐令ハ國律ヨリ
繁蕪ニシテ卷帙尤多ニ唐律ハニリアリ唐令ハ
今ノ世カツテ其書絶
テ十ヶレトモ今六典
ヲ以テ是ヲ考ルナリ 大宝ニ律令ヲ撰セラル
ルヤ專ラ唐ノ律令ニ據レルカ故ニ其後繁蕪
十レノ間養老ニ之ヲ刊シルト見ヘクナリ如

何ッ大宝ノ律令合ヒテ十七卷ナリヲ養老ニ
刊レルトシテ却テ律令二十卷トナルノコト
テニヤ且天長令養解序ニ分テ為一十卷名曰
今養解トアリ養老ヨリ令十卷ナル物ナラハ
何ソ養解ヲ作レルトキ令為一十卷イハニ是
養解ヲ加ヘテ張敞ノ増セルニ依テ初テ分テ
十卷トスル一明ナリモカレハ今ノ令ノ十卷十
ルハ養解ヲ加ヘタルヨリノ卷数ニシテ養老
ヨリノ十卷ニハアラス右弘仁格ノ序ニ各為
十卷トナルモアヤヨリナルカニタハ彼ノ序ノウタカハニ

ク真ナラサルカナルヘシ讀者熟察スヘニ充
賢

右令律ノ大意大宝養老ノ新古ハ差別公下先
師源惟長柳原氏ノ壺井羽倉等ノ説ニ折衷ニ
テ令養解ヲ閱見スルノ一冊アリ其中ニ件々
ノ事ヲ頭緒ニテ筆ニテケルヲ今愚老其及諸
ニ追テ續日本紀ノ條ニテ拔萃ニ且叙スルニ
私説ヲ交ヘテ事繁ク文長キニ及ヘリ充賢此
徴考ハ書ニテ以テ講會遺忘ノ副言ナレハ努

努他眼ニ入ルヲ禁スルナリ謹白

寛政二年十月二日夜燈下草稿入 嘉徳

右一冊漸々うろし筆の後日法書して一二ノ白志

會言スヘキモノナリ

前令ト云文義解ニアル条

公式令詔書式終文ニテ義解謂大少丞並在者ニ
以次注定奉行為准少輔以上故也前令云少輔
不在者丞見在者准此今改去餘宜見在者故知
録亦得也

同下式 勅某國司宦位姓名等義解云謂國司
非一人故云等ト其前令別有勅符式此令既除
即知丞馭之外更無勅符

云云延喜儀式曰更宣云今日彼大嘗乃直會乃
典閣召日尔在云云名目抄直會又下学集直礼
内宮儀式ニハ奈保良比ト書リ外宮儀式ニハ
直會ト書來レリ如此古ヘヨリ文字ニハ直礼
直會直相ト書キ其訓ハナラナイ又ナラナイ又ナラ
アイナト様々アリテ文字ト訓義ト異同區々也
ト云ヘトモ其義ハ各神供ヲ御饗奉ルコトナリ
去レハ神祇ニ御饗スルヲハ古語嘗奉ルトイフ
大嘗祭新嘗會祭ヲハニメ神嘗祭等日本紀ノ嘗
殞ト云モ又其義同ニ是ヲ秋日本紀ニ考ルニ

其秘訓ニサメラヒ奉ルト訓アリ又新嘗ハ新
穀既ニ熟乃後饗嘗也ト云ヒテナメラヒハナ
メアヒノ禱訓ナル事ヲ知ルヘニ其ナメアヒ
ハ嘗餐ニテ正トヒトハ通音ナレハ即ナメア
ヒトナルナリ又猶直悉嘗ノメノ禱音ニテ會
又相トモニ餐ノ禱音ナル備室ナリ公事根源
抄神今食ノ條ニ曰神膳ヲ供セラル儀アリ
白黑ノ御酒ニイリテ本櫛ニテソクナラ
ヒノ御飯トキニイリ又レハ宮主税申ス云
建武年中行且前ニ云ヘル延喜大膳式ハ直相
事モ又同ニ行

北條九代記云ハ玉繩ノ城ヲ甘繩ト書テ假名
ハ夕ヲナワトアリ此訓ノ異同ノリ和書多ク
ハ通音ヲトリテ假名書ノ借字アリ即チ此直
會ノ事モ文字ヲ以テハ其字義ニ合スナラハ
トテ和訓ニ依テモ其訓ワカシス爰ヲ以テ因
史ヲ探リ舊記ヲ檢出シテ其將音ヲ牽合シ假
名書ナレ借字ヲモ畢竟ニテ朦々トニテ思意

ヲ注スルナリ猶又神宮ノ書記ト和訓ノ義ニ
委キ人ノ考ヲ俟ノミ亢賢

追加

事ノ序ニ筆ス今禁中内侍所ヨリ御供米ヲ申
出シテ頂戴スルナリ多クハ年越ノ夜貴賤
トナク御所ニ参リテ拜戴ニテ越年ヲ祝ス是
ヲ民庶ノ言葉ニヲクニテ戴クト云ヒ習セリ今
件ノナヲアケナラヒニ依テ思ヒヲクニハ
御供米トルハ是ヤ嗣舌ノ轉語ナリ尋常ニ

古島解由小路ヲカテノ小路ト云ヒ鳥丸ノカ
テスニ東ノ洞院ヲ東ノトイ勸修寺ヲクハニ
シユニト云フ共ニ函舌ナリ憶ヒ考フヘシ
寛政七年六月五日漫筆ス

高家名目之事

鹿苑院殿記ヲ考ルニ應永元年十二月十七日
美満公御嫡男美持朝臣九歳ニテ叙爵アリ
勅使將軍ノ御亭ニ参向アリテ五位下左馬
頭ノ任叙ノ事ヲ達セラル美満公件ノ補任ヲ
拜見アリテ以ノ外ニ腹立アリテ申サレハ
我既ニ天下ノ武將タルニ三代ニシテ三公ノ
位ニ居ルトモ三世ナリ何ソ然ルニ今度ノ補
任ノヤウ清華以下ト等ニキ事以テノ外ノ事
ナリ夫當家ハ皇孫トシテ天子ノ臺ヲ出タレ

幸不遠都テ人臣ノ中先祖天子ノ皇ヨリ出タ
ルヲ以テ公家ニハ是ヲ親王家ト云武家ニハ
是ヲ高家ト云假令ハ子孫民間ニ下ルト云ハ
トモ當宦ノ大名ト同位ニ礼儀ヲ行フ當家人
臣ニ下ルト云ヘトモ皇孫ナリ攝家清華ノ輩
當時高宦タリト云ヘトモ先祖ヨリ臣下ノ家
ナリ故ニ公家ハ其家々ノ古例ニ依テ昇進極
アリ武家ノ高家ハ皇孫タルヲ以テ太政大臣
正一位ニ昇ルトテモ子細ナレタトヘハ皇統
ノ断絶ニ及ニトスル時ハ天下ノ人誰人ヲ以

テ當今ノ主トセシヤ假令民間ニ下ルト云ヘ
トモ皇孫ノ人ヲ尋テ主上トスヘシ何ノ代々
先祖ヨリ人臣タル家ヲ取立ニヤ是我國神國
ノ天竺宸旦ニ勝タル一ノ奇妙ナリト申ナレ
タルトアリ依テ思フニ百寮訓要抄ニ云神祇
伯ハ伊勢大神宮以下凡神事祭礼トシテ
昔高家ノ人ト云テ是子任中古以來ハ己氏ト云モ姓可
後々伯ノ堂任次也ト云
爰ニ高家ノ人々ト云フハ家系貴キ人々ト
云フナリ職原抄ニ昔ハ諸氏混任ストア凡

ト同ニ
右ノ文ヲ以テ比量スルニ當代ニ高家ト称セ
ラレテ其身ハ武家ノ御旗本タリト云ヘトモ
勤役ニ玉所ハ常ニ公家御往来ノ事ニ預リテ
恒例ノ御嘉儀ニハ御使節トシテ京上アリ又
臨時ノ御吉凶ニモ同ク京上ノ事アリナリ然
シテ至極ノ御重事ニハ御家门御譜代ノ大名
方ヲ御使節トシテ上京ヤシメ玉ノ下モアリ
ト云ヘトモ其御副使並ニ西九亞相ヨリノ御
使節ヲハ必高家ノ方ヲ上京ヤシメ玉ヲナリ

其餘ハ勢州ヘノ御代拜又ハ日光山久能山等
ヲ始メ神席等ヘノ御代拜ハ各高家ヲ役シタマフ
事ナリ故ニ宦位ノ昇進ハ尋常ノ大名ヨリハ著
ク次第速ニシテ正四位ニ叙シ中少將ヲ以テ先
途ト斗タマヘテ御家门ノ歴々ニ國持ノ大名
ト尤ヲナシ趣キナリ故ニ高家ト称セラルハ
家々ハ一世有功ノ族ニハアラサシテ祖先ノ
家系ヲ撰マシ又ハ當代新ニ公卿ノ家ヨリ分
賑アル人々ヲ以テ高家ト定メ玉ノナリ其後
全ク羨満公ノ言葉ニ符合スルモノカ嘉樹家

系並ニ姓属ノ事ニ不覺悟ナリト云ヘトモ大
 凡ニ人々ノ談話又ハ古キヲ考ヘテ其家々ノ
 事ヲ今推ニ注スル事左ノ如シ
 公家分限ノ家々ハ
 六角 烏丸家ナリ 有馬 久我家ナリ
 中條 樋口家ナリ 戸田 六條家ナリ
 前田 押小路ナリ 大澤 持明院家ナリ
 高辻家ナリ
 長澤 外山家ナリ 日野 日野家ナリ
 足利家分限ノ家並新田源氏ノ家々
 足利 大友 新田 由良

足利 土岐 今川
 足利 上秋 新田 由良
 足利 畠山 日 品川
 足利 京極 日 吉良
 平内府信長公ノ分限家々ハ
 織田一統
 新羅源氏 甲陽
 武田
 大凡右ノ家々ノ家乗ナリヘシ 猶其家ニニタツ
 子テ分限ヲ注ニ改ムヘシ 嘉樹 密ニ業スルニ公

家ヨリ分レタル家々ノ中ニテモ其本家ニ又
甲乙ナル者ニテハ家系ニヨリテ六位ヨリ
立テ公卿ニテニ至リ玉フモアリ又ハ新家ト
ニテ公家ノ家ヲ立テラレ、モアリト人ヘト
モ各共ニ先途公卿ニ昇リ玉ヘハ強テ方レリ
トモ謂ヒカクキモ力是等ノ事ハ愚意ノ及
ヒナキモノナリ猶悉譜ノ道理知りタラニ人
尋明ムヘシ

天明八年八月九日 假初ニ記ス

大判吏部卿

爰纂曰蚩尤師魑魅與黃帝戰帝命吹角龍鳴以
禦之蓋角聲黃帝氏也谷儉角賦曰夫角蓋會群
臣於泰山作清角之音号令之限度也軍中置之
以司昏曉故為軍器也

右大角小角之事前世軍器並衰後之條々名爰
了リト云ヘ氏後世廢散ニテ其形狀事實共ニ
愚意ノ及ナクモノナリ今真偽雖無差別書ニ
因ニテ共ニ後見ノ黨助ヲ得ニテテ欲スルト
リ充賢胡亂ノ最一ナルニ後見ノ明識ヲ願
フカ故ニ不秘不耻ニテ及外見ナリ老

